離さない　　川上弘美

教材のねらい

1　選定の理由

この作品は、『神様』に収録された短編九編のうちの一作品である。『神様』は表題作の「神様」も含め、人間以外の異世界、異種との交流を描いた作品となっており、「離さない」では人間以外のものとして「人魚」が登場する。

主人公の「わたし」の上の階に住む「エノモトさん」が、旅先で人魚を拾う。エノモトさんの生活は次第に人魚に侵食されていき、「このままでは自分はだめになってしまう」と言って、「わたし」に人魚を預ける。「わたし」は人魚に魅了され、人魚を預かってたったの一週間で日常を失い、「これではいけないとぜんぜん思わなく」なったところで「エノモトさん」が現れる。人魚を海に帰しに行った二人は、人魚をなかなか離せないのだが、人魚を海に投げ入れ、「やっぱり離れられない」と思ったところで人魚から「離さない」と言われる。この言葉により、執着する、されるの立場が逆転し、「わたし」は恐怖を感じて逃げ出す。

何かに魅了され、執着することは、日常生活に多かれ少なかれ影響を与える。本作品は短い淡々とした言葉で、「わたし」が人魚に魅せられていく様子や日常生活が失われていく様子が描かれている。その様子は、読み手にとっても何かしら思い当たることがあるだろう。自分にとっての「人魚」はなにか考えてみることで、作品に現れるテーマや象徴について学ぶことができるよい作品である。

2　指導のねらい

作品に現れている比喩表現や、作品に何度も取り上げられている「モノ」が果たす役割を考えることで、比喩や象徴を学ばせたい。さらに、小説のテーマを考えることにより、ただ読むだけに留まらず、読みを現代社会の問題について広げる活動につなげたい。

また、言葉の使い方や漢字ひとつをとってもニュアンスが変わり、作品の中に散りばめられているしかけを読み取ることで、小説のおもしろさを実感してほしい。

(1) 人魚が「モノ」として捉えられている表現と、そうでない表現を探し、その効果について理解する。

(2) 作品の中で何度も取り上げられている「モノ」が果たす役割を考えることで、比喩や象徴について学ぶ。

(3) 「エノモトさん」と「わたし」が人魚を預かってから、日常がどのように変化したかをまとめ、人が何かに執着するとはどういうことか読み取り、自分の体験や生活に結びつける。

3　評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで作品に表れているものの見方・感じ方・考え方をつかみ、現代の社会・文化について批評する能力を身につけようとし、学習課題に沿って、伝説・小説や図像を調べることを通して、比喩や象徴の意味を考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
導入	1 タイトルの言葉の印象から、ストーリー展開を予想させる。 2 表現上の特徴に注意しながら、文章を味わわせる。	①「離さない」というタイトルから、ストーリーを想像する。 ②擬音語、擬態語、比喩表現などの表現の特徴を捉えながら、全文を通読する。知技・思判表 ③初読の感想や疑問などをまとめる。	①「導入の問い」を参照。「離さない」という言葉が持つ印象や言葉の力の強さを感じさせたい。「離さない」のほか、「離れられない」「離せない」など、それぞれの言葉の持つ印象についても考えさせる。 ②学習者の実態に応じて、指名音読か、範読かなどを判断する。特徴的な擬音語、擬態語などについて適宜説明する必要があるが、日常のなかで静かに進む異常事態を読み味わうため、あえて演出を避け、淡々と読みたい。 ③現代が舞台でありながら、寓話的、幻想的な物語である。多くの学習者は通読後、戸惑いがあることが予想されるが、そのような戸惑いや疑問をそのまま受けとめて感想をまとめさせる。
展開 1	1 作者独特の表現を理解させる。 2 それぞれの登場人物の描写方法の違いをふまえ、人物像を捉えさせる。 3 エノモトさんと人魚の関わり方から、エノモトさんの心情を捉えさせる。 4 「わたし」と人魚の関わり方から、わたしの心情を捉えさせる。	①〈第一段〉（初め～二四四・上16） ②①「わたし」とエノモトさんの関係を理解する。思判表 ②桜や花びらの描写にどのような効果があるか考える。知技	①特別に親密ではないが、気軽に部屋の往来があるという微妙な関係性を理解させ、どのような仲の人が、秘密や執着の共有相手になるのか考えさせる。 ②人魚と桜の関係は、全体の構成を踏まえたうえで様々に解釈できる。ここでは桜の象徴や日本文化などには触れず、物語上での印象を相談させる程度に留めたい。
展開 2		①〈第二段〉（二四四・上18～二四五・下3） 人魚の描写に注目し、その表現効果を理解する。知技	①エノモトさんの外見描写がほとんどない一方で、人魚は詳細に描写されているという違いに注目させる。人魚がリアルに描かれる表現効果として、物語世界が幻想的でありながらも、現実世界の延長として読者が想像することを理解させる。
展開 3		①〈第三段〉（二四五・下5～二四九・上14） エノモトさんの描写の変化から、人魚への執着を理解する。思判表 ②「わたし」の言葉遣いや態度から、人魚に対する心情の変化を理解する。思判表	①エノモトさんの様子の変化に注目させる。人魚を紹介したり、説明をしたりする場面と、「わたし」に預けてから部屋を走り出す場面での違いを理解させる。 ②エノモトさんの描写の変化と共に、「わたし」の様子や心情にも注目させる。人魚に執着するエノモトさんと対照的に描かれる部分や、無意識のうちに人魚に魅了されていく部分を丁寧に読み取り、第四段への橋渡しの段落であることを理解させる。

時限	展開		まとめと発展
指導上の重点目標	5　「わたし」とエノモトさんの人魚への執着と恐怖を捉えさせる。 6　「わたし」とエノモトさんにとって人魚がどのような存在だったのかを考えさせる。		1　作品の寓意や表現効果について考えさせる。 2　日常の読書に進展させる。
学習活動	① 〈第四段〉（二四九・上16～二五一・上12） 人魚から離れられなくなっていく「わたし」と、エノモトさんの葛藤状態を理解する。思判表 〈第五段〉（二五一・上14～二五三・下15） 人魚を海に帰すまでの心情と、「離さない」という言葉の意味を理解する。思判表	① 〈第六段〉（二五四・上1～終わり） 「わたし」とエノモトさんにとって人魚とは何か考える。主態	①　タイトルの意味や、桜の描写と効果について考える。主態 ②　作者の他の作品を紹介し合い、読書につなげる。思判表
指導上の留意点	① 「わたし」の様子の変化に注目させる。またエノモトさんが人魚を海に帰すために迎えに来る場面では、前段と逆の立場になっていることに注意させる。その際、エノモトさんの言動と心情が全く同じではないことを理解させる。 ① 「わたし」とエノモトさんの言動を比較してまとめさせる。それまで「離れられない」と思っていた「わたし」が、人魚に「離さない」と言われて逃げ出したのはなぜか考えさせ、ここでは主客の入れ替わりが恐怖の内容であったことを理解させる。	① 人魚とは、自己を喪失してまでも共に在りたいと願う、あるいは無意識に感じる執着の対象であり、人が何かに魅了され執着する在り方がこの作品の主題の一つであることを理解させる。自己を惹きつけるものがあったかどうか体験を振り返ったり、人間の性質としての執着を想像させたりする。	①　主体として「離さない」ために強さが必要であるなど、本文を根拠に考えさせる。夢オチとも読める桜の意味や効果については、全体の内容を踏まえた上で考えさせる。 ②　短編集「神様」の作品を中心に、その他作者の作品や、映像化された作品なども紹介し、メディアミックスやアダプテーションの話題にも触れたい。教室の外での読書体験を改めて教室で共有するような指導も積極的に行いたい。

作者

川上弘美

昭和三十三（一九五八）年四月一日～。小説家。俳人。東京都に生まれる。昭和五十五（一九八〇）年、御茶の水女子大学理学部生物学科を卒業。在学中はＳＦ研究会に所属。卒業後、東京大学医科学研究所で二年間研究員を務める。同時期にＮＷ―ＳＦ社で編集に携わり、「季刊ＮＷ―ＳＦ」に自身の短編を掲載する。昭和五十七（一九八二）年から六十一年まで、田園調布雙葉中学校・高等学校で理科の教諭を務める。

文学活動

平成六（一九九四）年「神様」で第一回パスカル短編文学新人賞を受賞。七年、「婆」が第一一三回芥川賞候補作品になり、八年、「蛇を踏む」で第一一五回芥川賞を受賞。十一年、作品集としての「神様」で第九回紫式部文学賞、第九回 Bunkamura ドゥマゴ文学賞を受賞。十二年、「溺レる」で第一一回伊藤整文学賞、第三九回女流文学賞を受賞。十三年、「センセイの鞄」で第三七回谷崎潤一郎賞を受賞。

その後も精力的に著作活動を続け、平成十九（二〇〇七）年、「真鶴」で芸術選奨文部科学大臣賞を、二十七（二〇一五）年、「水声」で第六六回読売文学賞を、二十八年、「大きな鳥にさらわれないよう」で第四四回泉鏡花文学賞を受賞。また、三十一年には紫綬褒章を受章する。内田百閒の影響を受け、寓話的であり、幻想性と日常性が混じり合う独特の作風が特徴。エッセイや対談も多く、俳人でもある。

平成十八（二〇〇六）年から谷崎潤一郎賞、十九年から芥川賞、二十年から三島由紀夫賞の選考委員を務める。その他、文學界新人賞（平成十七年から十九年）、野間文芸新人賞の選考委員も務める。

作者を解くカギ

文壇デビュー作品となった「神様」は、初期の川上弘美を代表する作品であり、その後に続く作者独特の作風を顕著に表している。

川上弘美本人が様々な媒体で内田百閒を愛読していることに言及している通り、幻想と現実が混じり合う世界で、異界と日常の交流が描かれる物語は、幻想文学を現代リアリズムに溶け込ませたような筆致である。この異界と日常の境界線が消えてしまった独特の世界を成立させるには、曖昧で可愛らしい登場人物やキャラクターではなく、あくまでもリアルな存在が物語内に確かな説得力をもたせることが重要である。

「蛇を踏む」が芥川賞を受賞した際、同時に直木賞を受賞したのが乃南アサであったために、マスコミは女性作家の時代到来を喧伝した。その一方で、川上の作風が寓話にすぎないという批評もあった。このような評価もやはり、作者が内田百閒をはじめとする幻想文学に親しんでいたことの裏返しでもあろう。

短編集「神様」では、様々な不思議な存在と「わたし」との交流が描かれる。「わたし」による語りは、それら他者達へのまなざしであると同時に、「わたし」自身の他者性を写す鏡でもある。

作者は父の仕事の都合により、赴任先であるアメリカで五歳から七歳までの幼少期三年間を過ごした。一九六〇年代のアメリカ

公民権運動に象徴される社会のなか、言葉の通じない国でアジア人として異文化に出会った経験の影響が、作品にとしばしば登場する他者との交流として描かれているのだろう。

川上作品の特徴と言えば、その独特な文体である。幼少期から児童文学に親しみ、児童文学翻訳者である村岡花子、瀬田貞二、石井桃子などの言葉の影響を受けている。文語調の古風な言い回しや、独特なオノマトペ、本来片仮名の表記を平仮名にすることによって、物語世界に柔らか、優しさ、不思議な情景が生まれ、また登場人物たちの心理描写の機微も描き出している。

出典

本文は「神様」（中央公論社　平成十）によった。「離さない」が収録されている短編集「神様」は九つの作品からなる。いずれの作品にも人間とは異なる不思議な生き物が登場し、それら異種との交流や関わりを通して、人間社会や人間そのものを描き出している。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、次の通り改めた。

○会話文の最後の句点を省略（全体）〔原文を尊重するため〕
○「めくらっぽう」→削除（原文Ｐ一七〇・7、教科書Ｐ二五三・2）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊教師用

○川上弘美について
「さらば愛しき幻獣―川上弘美「神様」に」小谷真理
すばる　平成十・十二
「小説の書き方―私の場合」川上弘美
「早稲田文学」　平成十二・十一
「彼女たちは小説を書く」後藤繁雄　メタローグ　平成十三
「一部を書いて全部を書きたい　川上弘美」川上弘美
「広告批評」　平成十三・四
○人魚について
「人魚伝説」（「知の再発見」双書32）
ヴィック・ド・ドンデ著、富樫瓔子訳　創元社　平成五
○桜について
「桜の文化史」小川和佑　朝日文庫　平成三
「桜と日本人」小川和佑　新潮選書　平成五

＊生徒用

○人魚を題材にした作品
「ウォーレスの人魚」岩井俊二　角川文庫　平成十三
「人魚の血：珠玉アンソロジーオリジナル＆スタンダード」
井上政彦監修　光文社　平成十三
「幸福な王子」ワイルド　新潮文庫　平成十五
＊「漁夫と人魚」を収録。

「人魚の森」高橋留美子（漫画）　小学館　平成十五
○桜を題材にした作品
「桜の森の満開の下」坂口安吾　講談社文芸文庫　平成元
「檸檬」梶井基次郎　新潮文庫　平成十五
＊「桜の木の下には」を収録。

主題

1. 執着する／魅了されるということ

何かに執着するということは、同時に魅了されていることであり、両者は同一のことである。執着する主体であったはずの自分が、実は客体として魅了される側であったと気付くとき、逃れられないという恐怖が生まれる。何かに執着し、没頭し続けるということで、他のあらゆる物事をなげうって他者や社会とのつながりを断ち、自分の人間らしさをも喪失することになる。

2. 執着を他者と共有するということ

執着を共有する相手とは、親しさや信頼関係と同時に一定の距離感がある。執着する物事の存在を共有することで、かえって独占欲が強まる一方で、独占状態から解放され、執着対象を冷静に見ることができるようにもなる。

構成

本文は一行空きで九段落に分かれているが、内容や場面のまとまりから六段落に分けた。第三段落の後半から「わたし」と人魚との関わりが描かれているとするのも可。

段落	ページ・行	段意
第一段	エノモトさんからの相談 初め～ P二四四・上16〈ベルを押した。〉	わたしの部屋の真上に住む画家兼高校教師のエノモトさんとは、ときどきコーヒーいれてもらいごちそうになるくらいの間柄である。ある日エノモトさんから相談に乗ってほしいと言われた。わたしとエノモトさんの部屋の前には桜の木があり、まだ咲き満ちる前ではあるが、風が吹けば花びらを散らせていた。
第二段	人魚を手に入れたいきさつ P二四四・上18〈扉を開けたとたんに〉～ P二四五・下3〈人魚なのだった。〉	エノモトさんの部屋の扉を開けたとたん、何かの匂いがしたが、しばらくすると部屋に慣れて気にならなくなった。エノモトさんは少し痩せたようだった。エノモトさんはコーヒーを飲むと、二か月前の話しを始めた。南方の海沿いを旅したエノモトさんは、漁村の小さな民宿に泊まった日の真夜中に、人間の大人の三分の一ほどの大きさの人魚を手に入れたのだった。
第三段	エノモトさんと人魚 P二四五・下5〈手に入れたものって〉～ P二四九・上14〈眠っていた。〉	浴槽には人魚がおり、その様子を見るうちにわたしは人魚のそばを離れたくなくなっていた。エノモトさんは人魚が気になって日常生活にも支障が出始め、仕事を欠勤するほどであった。このままではだめになってしまうと思い、わたしに預かってほしいと願い出る。人魚をわたしの部屋の浴槽に運ぶが、エノモトさんはしばらく人魚から離れようとしない。真夜中、突然エノモトさんは声をあげながら人魚を残して部屋を走り出た。
第四段	「わたし」と人魚 P二四九・上16〈たしかに人魚から〉～ P二五一・上12〈海まで走った。〉	人魚を預かって数日が過ぎ、いつのまにかわたしも人魚から離れられなくなっていた。浴室の中で生活するようになり、社会生活に対する関心が薄くなっていた。一週間後、これではいけないとも思わなくなったころにエノモトさんが訪ねてきた。人魚を海に帰すと言って黒いビニール袋に人魚を入れ、嫌がるわたしを強引に連れだし、海まで車で走った。
第五段	執着と魅了の恐怖 P二五一・上14〈どこの海岸なのか〉～ P二五三・下15〈眺めていた。〉	海沿いの土手は桜並木で、花びらが舞っていた。わたしとエノモトさんの声は次第に弱々しく、ぼんやりとした口調になる。少し笑うエノモトさんを見ると、人魚を海に投げることができた。人魚はわたしだけを見ており、わたしが離れられないと言おうとした瞬間、人魚が「離さない。」と言った。わたしはうわあと声をあげ、浜に向かって走り、耳をふさぎ砂に顔をうずめていると、人魚はいつの間にか去っていた。桜の花びらが散ってきた。
第六段	執着するための強さ P二五四・上1〈翌朝から〉～ 終わり	翌日からわたしは高熱を出し、体調が戻ったころには桜はすっかり散っていた。人魚のすがたかたちも、離れたくない気持ちもはっきりとは思い出せなくなっていたが、桜の散る様子を克明に覚えていた。人魚をずっと離さないでいるだけの強さがなかったのだと二人は思った。風に揺れる桜の新緑の若葉をそれぞれ眺めていた。

板書例

【展開順】

1　第一段　起

○エノモトさんからの相談

エノモトさん

画家兼高校教師
「わたし」の部屋の真上
地区の自治会の役員同期きっかけ
ときどきコーヒーをごちそうに
世間話
＝そのくらいの仲
（近過ぎず遠過ぎない）

二か月前　妙なものを手に入れた
←
←コーヒーの誘いがない
←
二か月後　桜が咲き始めていた（春）
花びらは、水に浮いてふよふよ
＝そんなこんな（物語の引き金）
←
エノモトさんから電話
相談に乗ってもらえないか

2　第二段　起

○人魚を手に入れたいきさつ
何かの匂い
少し痩せたか

わたし

一緒に笑い、コーヒーを飲んだ
（感情の共有、コーヒーで繋がり）

「二か月前ね。」と始めた。
（読者の関心を引く）

エノモトさんの話
南方に旅
真夜中、海岸を歩いた
網の中になにかいる
中のものは動かない
生きているらしい
人間の大人の三分の一ほど
＝それは人魚なのだった

淡々とした描写の連続
人魚の克明な外見（リアルさ）

3　第三段　承

○エノモトさんと人魚
浴室にわたしを招き入れる
（秘密の共有）

人魚

潮の匂いが強かった（リアルさ）
このひと、と言いなおした
人魚のそばを離れたくなかった
（執着／魅了はじまる）

エノモトさん

民宿の部屋に連れ帰った
交番に届ける（人扱い）

わたし

拾得物の処理方法（物扱い）

○人魚への執着
気はそぞろ
目が離せない
人魚のそばにいれば落ち着く
五回も欠勤（社会生活に支障）

「行きたくてしょうがない」
←言ったとたん
二人で、争うように、浴室へ

○エノモトさんの異変

エノモトさん
預かってほしい
人魚を海に帰す―知らないふり
浴槽の横から動こうとしない
目に、光がない
黙って睨んでいる
（手放す瞬間に最も葛藤）
←
←真夜中まで
←
突然大きな音
ころがるように出てきた
うわあ、というような声
部屋から走り出ていった

人魚
コップに浮かせた桜の花びら

4　第四段　承

○「わたし」と人魚
人魚を預けられて数日
人魚を眺め
のそばになるべく長く座り
と共に眠った。
（人魚への執着が段々と強まる）
←
エノモトさんと同じ状態
浴室で暮らす
電話が鳴っても出なかった
（外部との遮断）
エノモトさんとは僅かに喋りたい
←人魚を預かって一週間後
いけないとぜんぜん思わない
（完全に魅了される）

エノモトさん
「人魚を取りに来た。」
（物扱い、執着が弱まる）
わたしの手を引く
（秘密、執着の共有者同士）
←
（車で）そのまま、海まで走った

5　第五段　転

海岸沿いの桜並木
花びらがひっきりなしに散る

わたし・エノモトさん
弱々しい声
まなざしが落ち着かない
甘い声
ぼんやりとした口調
＝わたしたちは離れられない
←
エノモトさんの笑い
ついに人魚を海に放り投げた

人魚
わたしだけを見ている
「離さない」

わたし
うわあ（恐怖）
耳をふさぎ、砂に顔をうずめた

人魚はいつの間にか去っていた
降りそそぐ桜の花びらを眺める

6　第六段　結

桜はすっかり散っていた

「魅入られたね」（受動態）

人魚をはっきりと思い出せなかった
桜が散る様子を克明に覚えている

あの言葉「離さない」

黙ってコーヒーをすすった
（執着＝魅了の共有者同士）
←
離さないでいるだけの強さがない
（人間性を失う恐怖に耐えられない）
（人魚を帰せた理由）

若葉が芽吹いていた
風が新緑を揺らしていた
（時間の経過、桜の幻想の終わり）

指導上の注意点

・「導入の問い」のねらい

「離さない」というタイトルから、どのようなストーリーを想像しますか。

（ねらい）「離さない」という言葉が持つ印象や言葉の力の強さを感じてほしい。本文には、「離さない」のほか、「離れられない」「離せない」など、「離～」という言葉が出てくるが、それぞれの言葉の持つ印象について考えるとともに、人魚が発する唯一の言葉がなぜ「離さない」だったのか、また、この言葉が、「わたし」や「エノモトさん」になぜ恐怖を与えたのかを考えさせたい。

●二四三ページ

問 **◎「そのくらいの仲である。」（上9行目）という表現から、どのようなことが分かるか。**

答 私とエノモトさんは、ときどきコーヒーを飲んで世間話をする程度の、特別親しい関係ではないということ。

●二四五ページ

問 **「しばらくじっと見ていると、」（上18行目）から続く部分にはどのような表現効果があるか。**

答 「わかった」「らしい」「なのだった」と、認識、懐疑、断定へと表現が変化することで、人魚を見たときの驚きを段階的に表わす効果。

補 驚きと同時に魅了されていく様子が効果的に描かれている。

●二四六ページ

問 **「こういうわけなんで」（上4行目）とあるが、エノモトさんが伝えたかったのはどのようなことか。**

答 エノモトさんが、実際に人魚を手に入れたのだということ。

補 人魚を手に入れたということが荒唐無稽な話だと自覚しているが、とにもかくにも人魚が自宅にいるという証拠を示した。また、曖昧な言葉で表現したのは、人魚が実在するという事実や、人魚から離れがたくなる気持ちについて、はっきりと言葉で説明できなかったから。

問 **◎「人魚、と言いかけたが…言いなおした」（上10行目）ことから、「人魚」をどのような存在として捉えていることが分かるか。**

答 高度な意識を有する、人間と同等の存在。

補 人魚が人語を解するかどうか分からなかったが、自分が人間以外のものに「人間」と呼ばれたら気分悪かろうと思ったからである。とある。「人魚」という種の呼び名でなく、「この」をつけ、「このひと」と呼ぶことで、人魚を個体として尊重していることが分かる。

●二四七ページ

問 **「交番に届けるものなの？」（上12行目）という「わたし」の問いかけに対しエノモトさんが「真面目に聞いてよ」（上14行目）と答えたのはなぜか。**

答 エノモトさんは人魚をただの物ではなく人のように感じており、行く当てのない人魚を交番にとどけて相談するのが適切だと思っていたから。

補 エノモトさんにとっては人魚を保護するために連れ帰ったのであるが、「わたし」にとっては「拾得物の処理」であるという認識の違いがある。「わたし」の質問が、話の腰を折るようなものに思えたのである。

●二四八ページ

問 **◎「エノモトさん」は、なぜ、「わたし」に相談したのか。**

答 このままではいけない、このまま人魚と一緒にいるとだめになってしまうと思い、とにかくこの状況を誰かに話したかったから。

問 **◎「このありさま」（下1行目）とは、具体的にどのような状態を指すか。**

答 人魚のそばに行きたくていてもたってもいられず、いちばんいいのは人魚を海に帰すことだが、知らないふりをする状態。

問 **「エノモトさんはどんなかと思うと、少しばかりぞっとした。」（下1行目）とあるが、この後エノモトさんは「どんな」状態になるか。**

答 何を考えているのか分からないような表情でただ黙ってわたしを睨み続ける放心状態。

補 いずれ「わたし」も同様の状態を反復することになる展開の伏線であることに気付かせたい。後の「うわあ」という声とともに走り出す姿も同じである。

問 **◉人魚を「最後は預かることになってしまった」（下2行目）のは、なぜか。**

答 ひとつはエノモトさんがこのままではダメになってしまう、と思ったから。それに加え、この時点でわたしは既に人魚のそばを離れたくなくなっており、人魚を離せなくなっていたから。

●二四九ページ

問 **◉「エノモトさんと同じ状態」（下11行目）とは、どういう状態か。**

答 人魚のそばを離れられない。外に出ているときの記憶があまりない。誰としゃべってもおもしろくない。電話にも出ない。つまり、外とのつながりを絶っている状態。

●二五〇ページ

問 **「これではいけない」（上10行目）とあるが、どのようなことが「いけない」のか。**

答 人魚に没頭して現実世界に適応できなくなってしまうこと。

補 エノモトさんの「このままでは自分はだめになってしまう。」（二四八・上16）という思いと同じ。

問 **◉「エノモトさん」の「人魚を取りに来た」（下4行目）という言葉から、どのようなことが分かるか。**

答 エノモトさんの人魚への執着が弱まり、落ちつきを取り戻したこと。

補 「迎えに来た」ではなく、「取りに来た」という言葉から、人魚が「モノ」に戻っていることが分かる。一週間人魚と離れたことにより、思考を取り戻している。

●二五一ページ

問 **「その声はさきほど来の声よりも少し弱々しかった。」（下15行目）のは、なぜか。**

答 エノモトさんも人魚への執着を断ち切れてはいないから。

補 人魚を運び出す際に、「ぼくだって長くそばにいればまた元に戻ってしまう。」（二五〇・下19）とある。

●二五二ページ

問 **◉「エノモトさんの笑いを見て、人魚を離せそうな気がした」（下11行目）のは、なぜか。**

答 「笑い」という、人の「感情」を表す表情を見ることによって、自分の感情（人間性）を取り戻し、緊張感が緩められたから。

●二五三ページ

問 **◉人魚が「わたしだけを見ている」（上1行目）のは、なぜか。**

答 エノモトさんは一度人魚を離しており、エノモトさんのことはもう見限っているから。人魚が今執着しているのはわたしだから。

問 **◉「やっぱり離れられない」（上4行目）と思ったのに、人魚に「離さない」と言われて、「わたし」が逃げたのは、なぜか。**

答 人魚から離れないことは自分の意思によるものであり、人魚の処遇を自分で決定することができると思っていたが、人魚の言葉によって実際は人魚の方が優位にあることに気づかされて、恐ろしくなったから。

補 この言葉により、執着する、されるの立場が逆転したから。自分が人魚から離れられないと思っていたのに、実は反対で、人魚のほうが自分に執着していたことに気づき、その執

着の強さに恐怖を感じたのである。

●二五四ページ

問 **◎「離さないでいるだけの強さ」（下 10 行目）とは、どのようなものか。**

答 人魚を離さないことと引き換えに、他者や社会とのつながりを絶ち、人間らしさを喪失してまで人魚と一緒に居続けることを恐れない強さ。

語句の研究

●二四三ページ

上1妙なもの　人魚のこと。後（二四四・上2、3）にも同じ表現が繰り返され、「わたし」同様に読者も「妙なもの」の正体に興味を持つようになる。印象的な冒頭部分である。

キー・ポイント　エノモトさん　カタカナ表記により、読み手が自由に人物像を思い描くことができる。「画家兼高校教師」であり、「わたしの部屋の真上の部屋に住んでいる」ことや、部屋の様子、コーヒーの淹れ方などが詳細に描かれる一方で、外見に関する描写は「髭をしごいた」（二四五・下7）こと程度で、ほとんどない。川上弘美は「あまり登場人物に色がつかないように」「カタカナにすることが多い」と述べている。（「広告批評」一部を書いて全部を書きたい　マドラ出版　平成十三）

上6とんとん　ここでは階段を上り下りする擬音語。軽快な印象で、エノモトさんとの気軽な間柄が連想される。

上11男所帯　男だけで女のいない暮らしのこと。他に「髭をしごいた」（二四五・下7）という部分で、エノモトさんの性別が分かる。

下3輪郭がくっきり　「画の道具」「カメラ」「雑誌」など、モノが多数置かれている部屋だと分かる。エノモトさんの人物像を想像する手がかりになる箇所でもある。

下6手動のミルで豆を挽き、布で漉す。　エノモトさんのこだわりの一面。本人の外見描写はほとんどないが、このように様々なモノを配置して人となりを表現している。

下8たいへんよろしきものなのである。　文語的な表現。「わたし」がエノモトさんのコーヒーを楽しみ、またありがたいものとして頂戴している様子とも読める。川上弘美は「よく古い言葉を使ってるって言われます。自分ではそんなつもりはないんだけど、書いているうちに自然と出てくるみたいで。」と述べている。（「広告批評」一部を書いて全部を書きたい　マドラ出版　平成十三）

●二四四ページ

キー・ポイント　桜が咲きはじめていた。　これ以降、要所要所で桜が描かれ、場面状況のと密接に関連した役割を果たす。エノモトさんが人魚を手に入れたのは物語の「二か月ほど前」、つまり二月初旬、桜のつぼみが膨らみ始める時期である。そして物語が始まるのが「咲きはじめ」の時期なので四月初旬、「わたし」が人魚を預かって一週間後に満開を過ぎ散り始め、最後の場面では「すっかり散って」いる。このように時間の推移が告げられつつ、それぞれの場面の印象を強めている。また、桜の満開に向けて人魚への執着度の高まりを示し、クライマックスである海の場面では、降り注ぐほどの花びらと人魚からの強烈な執着の恐怖を印象付ける効果もある。さらに、桜と人魚の描写を重ねることで、すべては桜がもたらした幻想のようにも読めるだろう。

上18何かの匂いがした。　この段階でもまだこの匂いが人魚のものであるとは明かされておらず、読者の興味を引きつける。

上20画架　絵を描く時にカンバスや画板を支える台。イーゼル。

下7少し痩せたか。　以前に比べ痩せているとの「わたし」感じているのであり、エノモトさんの元来の容姿に関することではない。痩せたのは人魚に執着するが故であろう。

下8エノモトさん、元気だった？　と聞くと、　「わたし」の台詞には引用符（「　」）がついていない。一人称語りが地の文と溶け合うように作品が成立している。「わたし」からの視点であることの強調、文章のリズムを良くすること、エノモトさんへの発話が読者にも向

けられているように感じられ物語世界に引き込まれるような効果などがある。

下9 眉をよせながら　不快や憂いの念などから眉の寄ったような表情をすること。眉をひそめる。ここでは話の腰を折られたように思った不愉快を示す。

●二四五ページ

キー・ポイント　まぐろよりは小さく、鯛よりは大きい。　まぐろの全長は約二〜三メートル。鯛の全長は約五十センチメートル。後に「人間の大人の三分の一ほどの大きさ」（二四五・下3）とあるように、ここでは具体的な大きさを示すというより、魚との比較をあえてする表現。また、この後に詳細な記述が続くが、登場人物とは対照的に、人魚について一定の外見イメージを読者が想像することになる。人魚を想像するときアニメや漫画的な表現をイメージしがちだが、非現実的な存在であるからこそ外見の特徴を丹念に描きリアルで具体的なイメージを持つことができる。あくまで現実世界で起きる出来事なのであり、ただのファンタジーとは違う絶妙なバランスの物語世界になっている。

上13 造作　「ぞうさく」。建築や建築内部の総称。比喩的に、顔のつくり、目鼻立ちのこと。

下7 髭をしごいた。　長い「髭」はエノモトさんの外見に関する数少ない記述の一つ。

下19 潮の匂いが強かった。　人魚は、初期の川上作品の特徴である、異種といもいうべき存在である。ややもするとアニメやおとぎ話で描かれるようなファンタジー的要素の強い存在だが、ここでは嗅覚的特徴を示すことで現実味を持たせ、人魚の外見をリアルに描いたことと同様に、幻想と現実が混ざり合うようにバランスを保っている。

●二四六ページ

上10 人魚、と言いかけたがやめにして、　「人魚」という種の呼び名でなく、「この」をつけ、「このひと」と呼ぶことで、人魚を個体として尊重していることが分かる。また、初めて人魚を見た時に既に、人魚に魅了され始めていたのである。

上17 盥　水や湯を入れて顔や手足を洗う器の総称。

上17 鯵　アジ科の魚の総称。全長約三十センチメートル。食用。

下20 人魚がいかに人を惹きつけて離さないか　「惹きつける」は、人の心を誘い寄せる、魅了するの意。ここで題名の「離さない」という言葉が出る。ギリシア神話の「セイレーン」や、「ローレライ伝説」を始め、各地に残る人魚伝説などを例として挙げることができるだろう。

●二四七ページ

上12 顔をしかめ　不快などから表情をゆがめること。

上17 真面目に拾得物の処理方法について考えてるんだわよ。　「わたし」はまだ人魚に完全に魅了されておらず、「拾得物」と表現しているが、エノモトさんにとって人魚は「物」ではなく、話がかみ合わない。また、この言葉遣いから「わたし」が女性であると判断できる。他に「お茶でもいれるわよ。」（二四八・下8）、「むつかしいわよ。」（二五二・下10）が同様の言葉遣いとして出てくる。

下1 最初は、　後に続くのはエノモトさんの言葉だが、「　」がついていない。一時的にエノモトさん視点の語りに切り替わり、地の文に混ざり合っている。「二か月前、南方に旅をした。」（二四四・下20）から始まる段落も同様。

下3 おっくう　面倒くさくて気が進まないこと。

下6 一刻も早く　わずかの時間も猶予がないこと。

下10 画布　油絵を描くのに用いる布。キャンバス。カンバス。

●二四八ページ

上7いてもたってもいられない　不安や苛立ち、喜びなどで、じっとしていられない様子。

下9エノモトさんは浴槽から動こうとしない。　エノモトさんの様子が急に変わった場面。「わたし」が自室に戻って浴槽に水を入れている間に、エノモトさん一人だけで人魚と一緒にいたことで、人魚に強く魅了されてしまったと考えられる。

●二四九ページ

上4エノモトさんの気配が部屋じゅうに濃く漂っている。　放心状態のエノモトさんが夜になっても人魚のいる浴室に長時間残っており、何が起きているのかも「わたし」には分からず、異様な緊張がはりつめている様子。浴室で人魚を見ているエノモトさんの存在を意識せずにはいられない様子。

上13 コップに浮かせた桜の花びらのように、ふわりと水に浮きながら、人魚は眠っていた。　「花びらは、水に浮いてふよふよと漂った。」（二四四・上12）にある桜の花びらと、人魚のイメージが重なる描写。また、エノモトさんの錯乱状態と落ち着いた人魚の様子が対照的に描かれ、読者に不気味な印象を与える。

下7会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め眠った。　前後で同様の表現が繰り返され、段々と人魚の記述が増える。「わたし」が人魚に執着し、没頭していく様子。淡々と描かれることにより、「わたし」の生気が失われていくことが強調される。

●二五〇ページ

キー・ポイント　エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした。　外部とのつながりを断って人魚に執着するなかで、エノモトさんとだけはどこかで関わりを求めるのは、二人の同質性や、近すぎず遠からずという距離感からであろう。エノモトさんが「わたし」に相談することにしたからこの物語は始まったのである。またこの記述から、この作品を「わたし」と人魚の物語ではなく、「わたし」とエノモトさんの物語として読むこともできる。

上16 インターフォン　interphone（英語）。玄関と室内、部屋と部屋との通話に用いる私設有線通話装置。

下13「海に帰す。」　二人は「いちばんいいのは人魚を海に帰すことだ」（二四八・上18）と最初から気付いており、それを実行に移そうとしている。なお、「返す」ではなく「帰す」という表記なのは、人魚が「拾得物」（二四七・上16）ではなく「ひと」（二四六・上10）のようであると感じているから。

●二五一ページ

上14 海岸沿いの土手には桜の並木があった。　人魚を手離す場面は、桜の花びらが舞い散る中で進行する。人魚と桜の魅力的、魔力的なイメージが重なり合う。

上15 ひっきりなし　切れ目がないこと。絶え間がないこと。「引き切り無し」の音便。

上15 葉桜　花が散って若葉が出始めた頃の桜。夏の季語。

上17 うららか　空が晴れて、日影の明るくおだやかなさま。多く春の日にいう。前出の「葉桜」が初夏を表す言葉であり、今がまさに春と夏の境界であることを示す。

下4せっぱつまって　「せっぱつまる」は、切羽詰まる。物事が差し迫る、全く窮する、最後の土壇場になる意。

下16 さきほど来　先程から、少し前からの意。

下17 目をしばたいた。　しきりにまばたきをすること。しばたたく。

●二五二ページ

上4誘う口調　「自分の声ではないみない」な「甘い声」のよる誘惑の言葉。人魚が「わたし」に言わせているとも考えられる。または、

「わたし」とエノモトさんの執着を共有する関係性を表しているとも読める。二人が執着を捨てることも、続けることも、執着を共有することに他ならない。

下8「せえの」　悠長な声とあるが、人魚に魅了されている状況下では精一杯の声だろう。また、この声は「わたし」とエノモトさんが二人で出す、人魚への執着に抵抗する声である。

●二五三ページ

上2白磁に切れ込みを入れたような目　この表現と「赤く薄いくちびる」（上7）という人魚の造作が、桜の花びらのイメージと重なり合う。

キー・ポイント　**「離さない」**　これまで「わたし」とエノモトさんの二人の側から「離れられない、離せない」苦悩が語られてきたが、一転して、人魚の側から「離さない」と言われる。伝説上の人魚はその声に特別な力があり、美しい声で人を惑わすこともある。これまで何も話さなかった人魚のたった一言発する言葉が、強い力を持っているのである。さらにこの直後、「はっきりと響く声で、人魚は言った。」「わたしの顔を見据えて、人魚は言った。」とたたみ掛けるように反復する表現によって、人魚の言葉の衝撃を強調している。しかし、そのあまりに強烈な声の力によって、離さない主体だったはずが、執着される客体でもあるという事実が暴かれた瞬間、人魚の魔力は恐怖に変わるのである。

上12うわあ、という声が、わたしの口からもれ出た。　かつてエノモトさんも同じ声を出した。「もれ出た」とあるように、あまりの恐怖が意図せず声に変わったのだろう。叫び声なのか、つぶやくような声なのかを想像することで、この恐怖がどのような心情なのか、さらに考えを深めることができる。

下11桜が、海岸にまで飛んできていた。　桜の花びらと人魚のイメージが重なり合う場面はこれまで何度もあったが、人魚そのものが、桜が見せた幻想だったとも読める。散っていく桜は、その魔力を使い果たしていく姿のようでもある。

●二五四ページ

上2桜はすっかり散っていた。　時間の経過、季節の移り変わりを表わす。桜が見せた人魚という幻覚もすっかり無くなっている。

キー・ポイント　**魅入られた**　「魅入る」は執念をかけること。多く受け身の形で、取り付かれること、強い魅力に惹きつけられ、心を奪われること。「人魚、なんだったんだろう。」という「わたし」の問に対する答えである。つまり人魚とは、何かに魅入られることの象徴だということである。この作品は二人が人魚に執着する、魅了される物語であり、また、執着や魅了という気持ちそのものを描いた物語であるとも言えよう。

下1桜が散る様子ばかりを克明に覚えているのだった。　人魚ではなく桜を覚えているということからも、全ては桜がもたらした幻想であったとも読める。

注意する語句

（＊で用例を示した）

うっちゃる…ほうり出す。ほったらかす。
＊宿題をうっちゃって友達と遊ぶ。

もったいぶる…いかにも重々しくおおげさにふるまう。
＊彼は昨夜の出来事をもったいぶって話し出さない。

そぞろ…気持ちが落ち着かないこと。そわそわするさま。
＊試験の結果が発表されるまで、心もそぞろだった。

涼しげ…ほどよく冷たくて気持ちのよいさま。さわやかであるさま。
＊涼しげな風が吹いてきた。

後じさる…前を向いたまま後ろへさがる。後ずさる。また、ためらってぐずぐずする。
＊猛獣を前に、彼は後じさった。

てきぱき…物事の処理や対応など、動作の機敏なさま。言葉や態度が歯切れのよいさま。
＊彼女は隊員にてきぱきと指示を出した。

歯を食いしばる…苦痛や困難・怒りなどを、歯をかみ合わせて必死にこらえる。
＊歯を食いしばり、声を抑えて泣いた。

魅入る…執念深くとりつく。心を奪う。
＊彼は悪魔に魅入られた。

鑑賞

作者の文壇デビュー作品でもある短編集「神様」のなかでも、「離さない」は異色である。同短編集に収められている他の作品も含め、「異界の者」とのコミットメントが共通のモチーフであるが、「離さない」における「異界の者」すなわち人魚とは、はっきりと決別する。いや、「人魚のすがたかたちも、人魚から離れたくないという気持ちも、はっきりとは思い出せなかった」とあるように、そもそも最初から人魚は存在したのだろうか。それくらい、人魚と「わたし」との距離は離れている。「神様」の「くま」をはじめとし、川上作品の多くは「異界の者」との接触を通しながら様々にその存在の性格を読み取ることができる。しかし「離さない」は、「分からない」ということに真正面から向き合った作品であろう。

物語は「旅先で妙なものを手に入れた」から始まる。人魚は「妙なもの」であって、それ以上でもなければそれ以下でもない。この冒頭の一文が、人魚を端的に表現している。その人魚を「手に入れた」のはエノモトさんである。エノモトさんは画家兼高校教師であり、しばしば旅をする。「異界の者」である人魚と出会うことができるのは、「境界／周縁の者」である。ところで、「異界の者」とは、まったく別世界のもの、想像も及ばぬ別次元の何かではない。人の世界に入り込み、言葉を操る時点で、「境界／周縁」性を持ち合わせている。人の世界の境界の者であるエノモトさんと、異界の境界の者である人魚が出会うのは必然であった。

そのエノモトさんと「わたし」は、同じ建物の上下の部屋をそれぞれの住居としている。数ある嗜好品にもれず、コーヒーも嗜好性が高い。エノモトさんがミルを引くところから淹れるコーヒーを「たいへんよろしきもの」と評する私は、コーヒーで緩やかにつながっている。嗜好性の共通こそが、秘密を共有する条件であろう。なぜエノモトさんは「わたし」に人魚の存在を明かしたのか。自分の執着を、それこそ強烈に魅了されているものを、誰彼構わずには打ち明けない。「異界の者」を共有する相手は、他でもない「わたし」なのである。

「神様」に登場する「異界の者」たちは、ファンタジーの住人ではない。あくまでも、現実の世界の存在として描かれる。人魚も同様に、エノモトさんと「わたし」の外見の描写がほとんどないこととは対照的に、その容姿や仕草、匂いまでもが詳細に、緻密に描写されている。「異界の者」と接触はしても決して馴れ合いはしない、一種の敬意の現れであろうか。

人魚への異様なほどの執着は、「どうやらそういうものらしい」。なぜ惹かれるのか、ではなく惹かれるものなのである。エノモトさんと「わたし」は人魚のそばを離れられなくなるが、どうして離れたくないのか、その理由は一切説明されない。「いにしえの昔から、人魚とはそういうものと決まっている」のである。その一方で、どのような執着なのか、その様子は克明に、グロテスクさを伴うリアリティで淡々と描写される。強すぎる執着は社会生活にまで影響を及ぼす。エノモトさんは、「自分はだめになってしまう」から、「わたし」に人魚を預かって欲しいと依頼した。だが、本当にそうなのだろうか。本当は、「わたし」に

も人魚を知って欲しかったからではないだろうか。コーヒーで緩やかにつながっていた二人は、人魚を媒体とした、いわば共犯者として強く結びついた。「わたし」が人魚にすっかり魅了され、外の世界への関心が薄れていた時も、「エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした」のである。

人魚への執着が一人で抱えきれるものではないことと同様に、その執着から離れることもまた、一人ではできない。最後の魔力を振り絞るように桜並木から花びらが散る、どことも知れぬ海岸は、あまりにも幻想的である。この幻想から逃れることができたのは、二人が新たに共有した「笑い」であった。

人魚には表情の描写がない。また、人魚に接するときの二人の表情や感情も描かれていない。人魚との関係性は、離すか離さないかであり、まさしく執着そのものなのである。その執着の主客が逆転したときに、執着することは魅了されることになる。執着する／魅了されることに、理由はない。なぜ離せないのか、なぜ離さないのか、その理由は最後まで明らかにならなかった。「分からないこと」ことの客体になること、あるいは「分からないこと」それ自体が、恐怖の正体である。

「異界の者」を理解するのは難しい。理解せずにただ受け入れることもまた難しい。二人は、「ずっと離さないでいるだけの強さ」がなかったと振り返るが、離そうとしないものから離れるためには、別の強さが必要である。人魚とは執着以外の関係性を持てなかった。それは、コミュニケーションの成立しない執着からなんとか逃げ出せたという、綺麗事ではすまない「異界の者」との接触の有り様である。「離さない」は、「分からない」ことを無理に分かろうとせず、けれども、どのように「分からない」のか、ということに誠実に向き合った二人の物語である。

最後に、人魚とのこの奇妙な出来事を描くためには、桜の存在が不可欠であろう。桜の咲きほこる美しさ、説明のつかない幻想性が、逆説的に人魚の存在に説得力を与える。この物語の三重性、すなわち、「わたし、エノモトさん／人魚」、「わたし／エノモトさん」、「人魚／桜」は、鮮やかに絡み合いながら、「離さない」の世界を描き出している。

参考

・「今はもうないものの光――川上弘美「神様」」　堀江敏幸（「文学界」〈文学界図書館〉平十・十二）

作者が目を凝らし、時には息をつめ、それでいて外からは肩の力をきれいに抜いているようにしか見えない巧みな呼吸をつむぎながら描き出すのは、当たり前のように遭遇した《存在》との精髄だけの恋なのであり、多少大袈裟にいえば、刹那的にしかありえない命の手触りである。／事実上の処女作として認知された表題作をふくむ短篇集『神様』に収められた九つの作品は、一様に接触と離反を主題としつつ、電子の冷たさをじんわりと人肌の温もりに変えるような不思議な熱を帯びている。ここにはあからさまな恋の台詞も性愛の場面もない。まさしく神様のみに許された高雅な差配があって、登場人物たちはみな、その透明な指図を素直に実践しているだけのようなのだ。強い気持ちで相手を所有しようとしないから、彼らは至近距離まで心が通っても最終的な合一など願いはしないし、離別に際しても自分を見失って泣き崩れたりしない。(…)ふわふわとして同時にどっしりとした存在感を彼（注・「神様」のくま）は持ち合わせているからだ。異界的とも呼びうる状況設定なのに、もってまわった口実作りなど抜きにして、なにかが突然《わたし》の日常に降り立ち、ひどく近しい《存在》となって呼吸を開始する。(…)／透明で重みのない幽霊を支えているのが、相合い傘や空豆といった具体的な媒介物であることも指摘しておいていいだろう。おなじマンションの部屋の真上に住んでいる、画家兼高校教師の独身男性エノモトさんとの、なんら疚しいところのない、淡白だがひどくうららかなつきあいを描く「離さない」での仲介項は美味しい珈琲であり、エノモトさんが南の海で拾ってきた人魚である。この小さなマーメイドをエノモトさんが浴槽で飼うようになってから、二人の関係にはかすかな波紋が生じはじめるのだが、人間界では薄倖を義務づけられているささやかな《存在》を介して、ふたりはようやく互いの気持ちを無意識に伝えあう。もちろん、伝えるばかりで成就しないところにこの作品の魅力はあるので、エノモトさんは人魚だけでなく語り手に魅入られて離れられなくなるのを懼れでもするかのように、貴重な異人を結局海に返してしまうことになる。「ずっと離さないでいるだけの強さがぼくにはなかったのかな」という彼の言葉は、しかし「強さがなかった」と認識する自然体の強さに、彼自身が、そして語り手がまだ半分しか気付いていないことを示しているだろう。すんなりと神様のご加護を引き出すためには、いまどき稀有な、押しの弱さの美質に対する無自覚が必要とされるのだから。／離す、離さないの関係図式は、ほかにも見出すことができる。「夏休み」と題された短篇の舞台は収穫期の梨園で、ここには毎年、奇妙な白い小動物が出現する。アルバイトをしていた語り手は、そのうちの一匹に接近するのだが、ひたすら梨を食べつづけたあげく季節の終わりとともに梨の木のこぶとなって消滅する《存在》たちは、じつのところ、ウテナさんにいきなり恋愛相談を持ちかけた河童や（「河童玉」）、そのウテナさんが日曜日の青空市で買って来た壺に住む、コスミスミコという、情痴沙汰で殺されて往生しきれずそこに暮らしているらしいコロボック

ル風の女性や（「クリスマス」）、夫の浮気が原因で母親がニンゲンフシンに陥っていると報告にくる、おなじマンションのえび男くん（「星の光は昔の光」）と同類なのである。えび男くんがしばしばのニンゲンフシンから立ち直ったときに口にする《星の光》の比喩は、本書（注・『神様』）に集約された新しい意思疎通のありようを代弁しているばかりか、川上弘美の小説に分有された、向こう側とのかすかな交感の秘密をも証しだてて、強い印象を残す。星の光は死んだ光だ、と少年は言うのだ。「昔の光はあったかいけど、今はもうないものの光でしょ。いくら昔の光が届いてもその光は終わった光なんだ」と。語り手を取り巻く名状しがたい《存在》たちを射し貫いているのは、この《今はもうないものの光》なのである。／ひたすらな受容に身を投じている彼らの内面でも、《わたし》の胸のうちでもない、彼らと《わたし》が触れあう時空の切なさをみごとに捉えた『神様』の連作の末尾を飾るのは、ふたたびくまを主人公とした物語（「草上の食卓」）である。郷里に帰る決心を固めたくまは、別れのピクニックに《わたし》を誘い、途中で雷雨に襲われると、落雷の危険がある傘を投げ出して、《わたし》を抱えるように地面にしゃがみ込む。そのとき身体いっぱいに拡がるくまの《温かみとしめりけ》は、いつ消えてしまってもおかしくない《存在》との、かすかだが確実な接点だ。「春立つ」に登場する飲み屋の女将、カナエさんの言葉を借りるなら、「雪が溶けるころにいなくなっちゃう、そういう存在のもの」を愛するために、作者は日々、くまの神様に祈りを捧げているのではないだろうか。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　人魚が「モノ」として捉えられている表現と、そうでない表現を文中から探してみよう。

【答】
・「モノ」として捉えられている表現
交番に届ける（二四七・上5～6、上12）
大きな荷物になる人魚（二四七・上10）
拾得物の処理方法（二四七・上16）
人魚を取りに来た（二五〇・下4）
・そうでない表現
「このひと」（二四六・上10、13、15）
「海に帰す」（二四八・上19、二五〇・下13）＊「返す」ではない

2　「エノモトさん」と「わたし」の日常が、人魚を預かってから、どのように変化していったか、それぞれについてまとめてみよう。

【答】
・「エノモトさん」
「最初は～」（二四七・下1）～「きみに相談することにした」（二四八・上1）までをまとめる。
・「わたし」
「わたしはいつもと変わりなく～」（二四九・下6）～「一週間後だった」（二五〇・上12）までをまとめる。

3　人魚を海に帰しに行ってからの、「エノモトさん」と「わたし」の様子を「声」に着目して抜き出し、気づいたことをまとめてみよう。

【答】
・「エノモトさん」
早足（二五一・上17）
決然とした足どり（二五一・下6）
「帰す」～少し弱々しかった。（二五一・下15～16）
「やめない」もっと弱々しい声である。（二五二・上2）
「まあそうだが」～まなざしが落ちつかない。（二五二・上6）
「そうかもしれない」～ぼんやりとした口調になっている。（二五二・上10～11）
・「わたし」
せっぱつまっているのに、眠くなる。（二五一・下4～5）
泣きそう（二五一・下14）
やめようよ（二五一・下17）
いいじゃない、～誘う口調で言った。（二五二・上3～4）
自分のどこからこんな声が出るのかわからなかった。（二五二・上4～5）

甘い声（二五二・上8）
いけない、いけない。～声が出ない。（二五二・上12～14）
口を開くと～懸命に歯を食いしばった。（二五二・上19～20）
▼ポイント▲　エノモトさんは再度人魚にふれ、どんどん意志が弱まっていき、声が弱々しくなり、最後はぼんやりしていく。わたしは自分の気持ちとは裏腹な言葉が口を開くと出てしまうので、懸命に歯を食いしばる。

4　作品の中で何度も取り上げられる「モノ」が果たす役割を考えてみよう。（例：コーヒー）

【答】
・「コーヒー」
　私とエノモトさんの日常を表している。エノモトさんが人魚を手に入れてから「コーヒー」の誘いがなくなる。わたしは久しぶりの「コーヒー」をおいしくいただくが、エノモトさんの部屋で人魚を見てから味が分からなくなる。最後、人魚から離れ、日常が戻った後、「おいしいコーヒー」の誘いがくる。また、「コーヒー」は中毒性があるものであり、エノモトさんとわたしは、この「コーヒー」でつながり、「人魚」でもつながったわけである。
・「桜」
　時間の経過と、人魚への依存度を表す。
　また、桜と人魚の描写を重ねることで、すべては桜がもたらした幻想のようにも読める効果がある。
・「浴室」
　閉鎖的で、人魚との濃密な時間を過ごす非日常的な空間を作り出している。
　その他、「花びら」などが考えられる。

言葉と表現の解答例

1　本文中から「離さない」「離れられない」のような、「離…」という語を抜き出し、それぞれの語の持つ印象について、話し合ってみよう。

【答】　「離れたくなかった」「離れがたい」「離れられない」「離れた」「離れない」「離せない」「離せそう」など。
▼ポイント▲　例えば、「私はあなたを離さない」と「私はあなたから離れられない」の二つの文を比べたとき、どちらの方が離れそうか、また、二人の気持ちが離れているのはどちらかなどを問いかける。また、例文にある感情や状態を熟語で表すとどんな言葉になるか、などを問いかけることで、それぞれの言葉が持つ印象が違うことに気づくことができる。
「離さない」（例・執着・束縛など）
「離れられない」（例・依存・未練など）

2　1で抜き出した語を使って、短文を作ってみよう。

【答】

・私はその場から離れたくなかった。
・あの二人は離れがたい関係にある。
・そう簡単には離れられないことに気づいた。
・少し離れたところから観察しよう。
・子猫が私の足下から離れない。
・心配で目が離せない。
・もう少しで手が離せそうだ。

言語活動の解答例

1　本文の描写をもとに、「人魚」の絵を描いてみよう。

【答】　この作品では、人魚の描写が具体的に細かく描かれている。それぞれが持つ人魚のイメージではなく、この作品の人魚の姿を具体的にイメージすることで、人魚の様子や人魚が言葉を発したときのインパクトがより印象的になるだろう。

2　人魚は、世界各国でこれまで、どのように描かれてきたのか、伝説・小説や図像を調べてみよう。

【答】　人魚は世界中のさまざまな文献に登場している。本文にも「いにしえの昔から、人魚はそういうものと決まっているし、などと、エノモトさんは言い、人魚がいかに人を惹きつけて離さないかをしばらく説明した。」（二四六・下18～二四七・上1）ともあるように、人魚は人を魅了し、不思議な力を持つ存在として描かれている。

　生徒が最もなじみがある「人魚」は、アンデルセンの『人魚姫』であると考えられるが、『人魚姫』では人魚がその美しい声とひきかえに人間の足を手に入れる。また、子ども向けのアニメでも人魚のキャラクターはその声に特別な力があり、歌声で船を沈めたり、歌うことで敵と戦ったりする。本文に、エノモトさんと私の声の描写があることや、人魚がたった一言発する言葉が強い力を持っていることなど、「人魚」について調べることで、読みを深める活動となることを期待したい。「参考文献」参照。

（堀　佑史）